



TITLE:

<総説>幻の古代都市『尼雅(ニヤ)遺跡』を訪ねて

AUTHOR(S):

伊東, 隆夫

---

CITATION:

伊東, 隆夫. <総説>幻の古代都市『尼雅(ニヤ)遺跡』を訪ねて. 木材研究・資料 2002, 38: 1-12

ISSUE DATE:

2002-12-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/51377>

RIGHT:

## 幻の古代都市『<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡』を訪ねて\*

伊 東 隆 夫\*\*

Short Visit to An Illusive Ancient City, "Niya Historic Site"\*

Takao ITOH\*\*

(平成14年8月31日受理)

### 1. は じ め に

<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡は、中国新疆ウイグル自治区のタリム盆地に広がるタクラマカン砂漠の中にある遺跡で、シルクロードの西城南道の沿線上に位置する。同遺跡は20世紀の世界的な考古学上の発掘の一つに数えられており、紀元前1世紀～紀元4世紀に栄えたとされる幻の古代都市で、当時、「精絶王国」または現地語で「チャドータ」とも呼ばれた。遺跡の規模は東西7km、南北25kmに広がり、仏塔を中心に70の住居址、多くの墓地や家畜小屋、窯跡、果樹園、橋、畑、さらには枯渇した河床や大面積の枯死樹林帯がほぼそのまま遺存している。<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡はかつて、スウェーデンのスウェン・ヘディン(1865-1952)やイギリスのオーレル・スタイン(1862-1943)<sup>1)</sup>によって踏査された経緯があり、わが国では西本願寺門主であった大谷光瑞師が探検隊を結成して<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡周辺地域を含む西域地方に3度にわたり調査に出かけている<sup>2)</sup>。近年では1980年に作家の井上靖氏およびNHK取材班が取材調査のために訪れている<sup>3,4)</sup>ことでも知られる。

本格的な日中共同の学術調査をおこなうために、1988年より佛教大学が中心となって同遺跡の調査がなされ、新たな住居址の発見、木棺に納められた多くのミイラならびに幾多の貴重な副葬品が発掘されてきた。筆者は1994年の調査に同行した経緯がある。かなり昔のことであるが、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡へは特別の許可がないと行けない場所であること、およびこれまでに同遺跡を調査した日本のグループは筆者の加わった調査隊が2度目であることなどから、この機会に今後の参考のために調査記録を留めておきたい。

ことの発端は佛教大学に設置されている中国新疆<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡学術研究機構の主要なメンバーの井ノ口泰淳先生(当時龍谷大学教授)、真田康道先生(佛教大学教授)らが来所され、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の調査をおこなうにあたり、木質の調査の協力をお願いしたいという申し出があったことにさかのぼる。同遺跡が僻地にある砂漠ということで、一瞬逡巡したが、シルクロード沿線の遺跡を訪れるまたとない機会であるのでお受けすることにした。

筆者にとって中国への旅は今回が初めてであった。ましてやタクラマカン砂漠にある<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡についてはまったくの想像の世界であった。大変厳しい環境の中にあるということなので、今回の調査に万全

---

\* 第57回木研公開講演会(平成14年5月17日)において講演した。

\*\* 木質生命科学研究部門 木質細胞構造機能分野(Laboratory of Cell Structure and Function)

Key words : Niya historic site, Wooden remains, Poplar, Tamarisk

を期する意味で夏に入るところから通勤には車は使わず公共の交通機関を利用するように心がけた。また、体力増強を考え、趣味のテニスも積極的に行うようにし、調査用の装備も出来る限りの準備をして臨んだ。

#### 行動日程 (1994年)

- 9月27日 大阪—上海（新疆文化庁派遣員合流）—北京—<sup>ウ</sup>ル<sup>ム</sup>チ
- 28日 新疆文物考古研究所（日中双方最終打合せ） 新聞発表 新疆人民政府歓迎宴
- 29日 新疆博物館調査
- 30日 <sup>ウ</sup>ル<sup>ム</sup>チ—<sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン 和田文管所収蔵品調査 先発隊合流 衣料などの贈呈
- 10月1日 <sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン—<sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン 和田—民豊 羊など購入 砂漠車隊合流 衣料などの贈呈
- 2日 <sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン 民豊—カパクアスカン村の先の砂漠で露営
- 3日 露営
- 4日 <sup>ニ</sup>ヤ 尼雅遺跡ベースキャンプ到着 テント設営
- 5日 遺跡調査
- 6日 同上
- 7日 同上
- 8日 <sup>ニ</sup>ヤ 尼雅遺跡ベースキャンプ—<sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン—<sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン 民豊—和田
- 9日 <sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン 和田にあるルワック遺跡探訪
- 10日 <sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン—<sup>ウ</sup>ル<sup>ム</sup>チ 和田—<sup>ウ</sup>ル<sup>ム</sup>チ
- 11日 新疆人民政府・文化庁報告 答礼宴
- 12日 <sup>ウ</sup>ル<sup>ム</sup>チ—北京 北京歴史博物館見学 国家文物局報告 答礼宴
- 13日 北京大学考古博物館見学
- 14日 北京—上海—大阪

## 2. <sup>ニ</sup>ヤ 尼雅遺跡の位置と調査の歴史

タクラマカン砂漠は北は天山山脈、南は崑崙山脈に挟まれており、両山脈の雪解け水が無数の川となってタクラマカン砂漠に入り込んでいる。天山山脈の南北両側に天山南路（西域北道とも言う）および天山北路と呼ばれるシルクロードが走り、同沿線に位置するオアシス都市を結びつけている。また、タクラマカン砂漠の南側には西域南道と呼ばれるシルクロードが走り、往古から東西の交易に利用されてきた。したがって、西域南道の沿線には多くのオアシス都市が発達し、無数の遺跡が点在する（図1）。西から主要な町をあげると、<sup>カ</sup>シュ<sup>ガ</sup>ル <sup>ヤ</sup>ル<sup>カ</sup>ンド <sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン <sup>ケ</sup>リ<sup>ヤ</sup> <sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン <sup>チ</sup>ェル<sup>チ</sup>ェン <sup>チ</sup>ャル<sup>ク</sup>リ<sup>ク</sup> <sup>ミ</sup>ー<sup>ラ</sup>ン 喀什、莎車、和田、于田、民豊、且末、若羌、米蘭が位置する。天山北路と天山南路の両シルクロードを西から東にたどっていくとトルファンで一緒になり、さらに西に進めば敦煌付近で西域南道と合流する。<sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン <sup>ホ</sup>ー<sup>タ</sup>ン 民豊は和田から約300 kmほどの距離にあるが、ここが<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅遺跡の入り口とも言える町である。尼雅遺跡は民豊を北上すること120 km離れた砂漠の中にある。民豊から北へ最初の90 kmの間は民家が点在して見られるが、残り30 kmは完全に砂漠の中である。

このように、中国でも特に奥深いところに<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅遺跡が位置し、往時に訪れるには相当の困難を伴ったであろうと想像される。西域といえは三蔵法師で知られる玄奘が紀元600年頃から664年にかけて踏査しており、その記録が大唐西域記<sup>5)</sup>に残されている。それによれば、紀元前1世紀には、今の<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅には480戸、3360人が居住し、<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅の入り口に当たる<sup>ミ</sup>ン<sup>フ</sup>ン 民豊にはこの半数の240戸、1610人が住んでいたとされる。当時も今と変わりがなく周辺一帯が砂漠でおおわれ、流砂に惑わされ、<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅にたどりつくには大変な困難をとまったことが読みとれるが、<sup>ニ</sup>ヤ 尼雅付近は広く沢地が広がっていたことが次の文章から窺い知れ

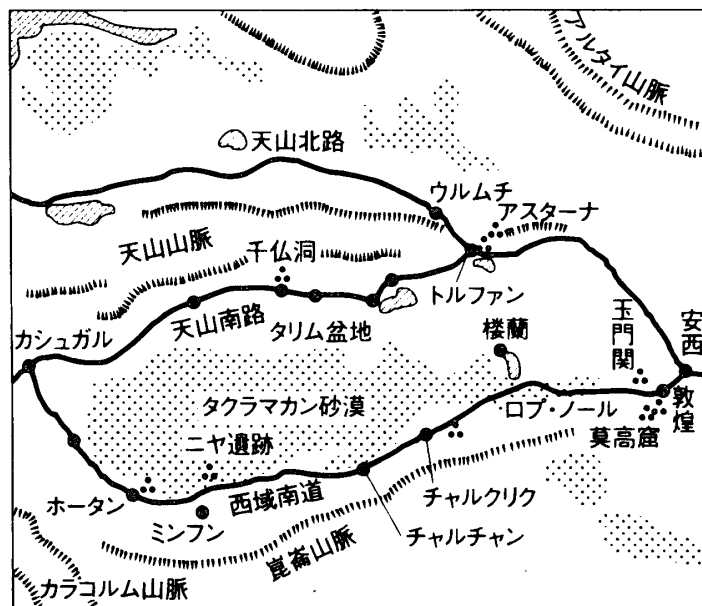


図1 シルクロードとニヤ遺跡の配置図

る。「<sup>ニヤ</sup>尼雅古城は周囲三、四里で大きな沢地の中にあり、沢地は温度、湿度共に高く、歩くのは困難で葦が生い茂り、道はなく、城への道をたどることにより通行できるだけで往来するものは皆この城を通らなければならない」<sup>4)</sup>とある。

このように、過酷な土地柄であるが最初に<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡を調査したのはイギリスのオーレル・スタイン卿で、1901年のことであった。その後同氏は1906年に第二次の調査、1914年に第三次の調査をおこなっている。日本人で最初に<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡に入ったのはNHK取材班で1980年のことであった。有名な大谷探検隊のメンバーですら<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡には足を踏み入れていない。

これより先、1959年に中国新疆博物館調査隊が調査に入っている。筆者の関係した佛教大学を中心とした日本隊は1988年から1997年まで約10年の長きにわたって調査を続けてきた。筆者は1994年の調査に加わり、かつ1995年には院生の大山幹成が筆者に代わって参加し、多くの木製遺物の調査をした。筆者は1996年および1997年の二度にわたり<sup>ウルムチ</sup>烏魯木齊にある新疆文物考古研究所を訪問し、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡出土木製品の調査をおこなってきた。

### 3. 現地調査

9月27日

小島康誉隊長始め15名の日本隊は午前11時発のJAL 793便で、開港したばかりの関西国際空港を一路上海に向けて飛び立った。上海には13時40分（現地時間で12時30分）に着き、早速持ち物の検査を受ける。順番を待っている間、近くで係官と乗客（いずれも中国人らしい）が激しい口論をするのが聞こえる。その一方で、昼間にもかかわらず別のオフィスの中から労働歌か何かを歌う声が聞こえてくる。これが筆者の中国へ行った最初の体験である。調査用の機材を含めて長さ1.5m、幅70cm、奥行き70cmの木枠の箱4個の他プラスチック製の箱やジュラルミン製のトランクなどの共同装備は大小合計20個近くあったので、われら調査隊の荷物検査はすべての乗客の検査が済んだ後になった。今回の調査は事前に中国国家文物局の許可を得ているので、本来なら何の問題も生じることはないところだが、検査に立ち会った女性係官からなかなか許可がおりず、結局そこで2時間ほど待たされた。おまけに待っている間、

邪魔にならないように空港ロビーの一隅にまとめて置いていた荷物の置き場代金まで請求されたと聞き、唖然とした。思わぬ事態の発生で北京經由烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>行きの国内便に乗り継ぐのが間一髪で間に合うという状況であった。

さて、国内線乗り場で荷物を積み込む作業の際、荷物重量が700kg オーバーし、8000円（日本円で約10万円）余分に支払ったと後で聞いた。ともあれ、上海発17時20分のアエロフロート（X09512）便で一路烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>へ向かうべく機内に乗り込んだ。ところが我々の座席番号が機内には見当たらなかった。ロシア人風のスチュワーデスに訊くと前の方にある空席へ案内してくれた。奇妙なことだがやれやれ。座席のスペースが狭く、座るのがやっとなのである。おまけに前にあるテーブルがうまく止まらず手前へ落ちてくる。機内も全体として暗く旧ソ連から譲り受けた中古の機体そのものである。昼食はパン、ビスケット、クラッカー、それに漬物の入った紙箱一つでお茶かコーヒーが付く。北京には18時00分着で、ここで烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>行きに乗り換える。北京を19時10分に発って烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>に着いたのが23時05分。空港には新疆文物考古研究所の人々が迎えにきてくれていた。迎えのトラックに荷物を積み、我々はマイクロバスに乗り込み宿泊所である華僑賓館に向かった。途中車内から望む烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>の町は道端にポプラ並木が整然と並んでいるのが大変印象的であった。

9月28日

午前8時起床。9時朝食。内容は野菜を炒めたもの。中国風漬物。おかゆ。蒸しパン。中国茶。ミルクなどである。午前10時にホテルを発って新疆文物考古研究所に向かう。午前中は同研究所で日本隊と中国隊双方のミーティング。午後2時に昼食。昼食後は新疆人民大会堂で記者会見。小島隊長が尼雅遺跡<sup>ニヤ</sup>調査の重要性を説明。同氏によれば今回の中国側の隊長である韓翔<sup>ハン</sup>氏からかねて新疆ウイグル自治区にある世界的な遺跡が三つあると聞いていたという。それは楼蘭<sup>ローラン</sup>、キジル千仏洞、尼雅遺跡である。楼蘭<sup>ローラン</sup>は調査がほぼ完了し、規模も小さい。キジル千仏洞は修復事業が目下進行中である。これらに対し、尼雅遺跡<sup>ニヤ</sup>はほとんど未調査で、世界的な文化遺産である。スタイン隊がすでに調査しているが、小島隊長は以下の四点の理由によりスタイン隊を越える調査の必要性を説明した。第一に、スタイン隊の遺跡発掘以来100年になるが、スタイン隊は単なる宝探しのような調査であった。第二に、スタイン隊の調査よりすでに30以上多い住居址を発見している。第三に、スタイン隊の測量は多くの点で間違っている。第四に、砂に埋もれた遺物が多く遺存している。以上の観点より今後10年間は調査をする必要性を強調した。17時40分記者会見終了。19時30分華僑賓館で夕食。

9月29日

午前8時起床。9時朝食。10時新疆博物館へ出発。同博物館は歴史文物、民族資料、ミイラ、仏教壁画の4つの展示コーナーを設けている。個人的に特に木製品に関心があったので、それらの展示を詳しく見学した。火鑽臼、(金占木取火器)、紡錘車、木簡、木盤、木盆、木案、木杖、木勺、木筒、木杯、木奩、木梳、木臼、木棺、紅柳祭器、火炬形木祭器、木偶、木鳥などの木器が新疆ウイグル自治区に点在する過去の遺跡から出土している。特に尼雅遺跡<sup>ニヤ</sup>から出土した木椀、木盆、木杯、木豆、木紡錘、斧柄が展示されており興味深く見学した。昼食後再び考古研を訪れ、1993年度の尼雅遺跡<sup>ニヤ</sup>発掘調査で収集された遺物を見学した。土器、鉄器、木器、玉、ミイラなど多数の発掘品が日本隊に公開され、各隊員はこれらの製品の見学や写真撮影等に時間を費やした。19時30分からは新疆人民政府迎賓館で歓迎の宴が開かれた。

9月30日

午前8時起床。9時朝食。午前中はフリータイムであったので衣類の洗濯を行うなどして時間を過ご

## 伊東：幻の古代都市『<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡』を訪ねて

す。12時昼食。13時華僑賓館を出発。14時ウルムチ空港で中国隊15名と合流。予定より約1時間ばかり遅れて、16時30分にアエロフロートの小型ジェット機XO9907便で和田市<sup>ホータン</sup>へ旅立つ。烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>空港を旋回しながら機首を南西に向けて飛ぶ。まず天山山脈を越える。天山山脈は奥深い山脈で、予想していたよりも幅が広く、かつ万年雪で覆われていることが印象として強く残っている。同山脈を越えるとたちまち平坦でかつ不毛の大地が目につく。これが巨大なタクラマカン砂漠である。機体が和田に近づく<sup>ホータン</sup>と急に緑のベルト帯が目につくようになった。和田付近は広い人工的なオアシスなのであろう。砂漠の上を飛ぶこと約1時間半で和田<sup>ホータン</sup>に到着した。着陸時には滑走路が見られず、砂漠の砂の上に着陸するかのよう<sup>ホータン</sup>に感じられた。それほどに滑走路は狭く、ごく限られたところだけがコンクリートで固められていた。それでも滑走路はでこぼこしていて、着陸時にはゴトゴトと振動が伝わってくるのが感じられた。また、飛行機のエンジンの排気ガスで砂が煙のように舞い上がっているのが分かる。まさに砂漠の中のターミナルである。18時に和田<sup>ホータン</sup>に到着すると関係者が迎えに来てくれていた。一行全員、車に乗り込み宿泊所である和田賓館<sup>ホータン</sup>にたどりついた。荷物を部屋に置いて夕方まで和田文管所<sup>ホータン</sup>を訪れ、和田近郊の遺跡ならびに<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の出土品を見学した。同文管所では<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の出土品として木鋤、掛矢、木柱頭、木彫 件、彫刻木柱、軛、火鑽臼、帶耳木杯、木杯、木盆、木碗、刀鞘、木案、梳了、木梳、木勺、刮布刀、紡錘用材、綫杵子、布机具、紡東搖把、紡錘車、木筒、炙柩（木棺）などの木製品を多数見学した。その後、和田賓館<sup>ホータン</sup>に戻り、18時30分より同館で夕食を兼ねて歓迎の宴が開かれた。羊の頭をはじめ盛りだくさんの和田料理が三つのテーブルに運ばれ、美しい烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>女性が宴を盛り上げる。彫りが深く、アジア人でありながら西洋人のようなマスクである。後で聞いたところでは烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>市では9割が漢人、1割が烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>人だが和田<sup>ホータン</sup>ではその割合が逆転して圧倒的に烏魯木齊<sup>ウルムチ</sup>人が多数を占めるという。23時就寝。

10月1日

午前7時30分起床。今日はいよいよ砂漠に最も近い町<sup>ミンファン</sup>の民豊へ出発する日である。砂漠での調査に必要な荷物のみを持参し、その他は和田賓館<sup>ホータン</sup>に保管してもらう。8時に軽く朝食。ホテルの前へ行くとすでに砂漠車（砂漠用トラック）が2台、大型トレーラーが1台、タンク車が1台、エンジンをふかしていた。日中双方の調査隊の主要メンバーはマイクロバスに乗り、一部は砂漠車に乗って9時30分に一路<sup>ミンファン</sup>民豊に向かって出発する。ホテルを出発して広い道や狭い道をいくつか曲がるとやがて一本のまっすぐな道に入る。道の両側は浅く掘られた溝となり、そこにポプラの木が密に植えられている。大きいものは直径30cmを越え高さは15mないし20mにも達する。これらが約1m間隔で3列から5列をなして植林されている。このような道路が砂漠の中をまっすぐに走るのでポプラ並木もまっすぐに続いている。和田の町を早朝に通り抜けるとやがて和田川を渡る。川幅は200m以上もある大きい川である。しかし、水はごく限られたところを流れるのみである。出発して30分も経つとポプラ並木の沿道にあった林の光景が次第になくなる。やがて、緑のみられない砂漠の光景に変わる。車窓からみるものはただ砂ばかりである。何分、何十分もその光景が続く。まっすぐに続く道のほかに沿道に沿って電信柱が点々と一列にならび遙か前方の村に送電されているようである。40分も砂漠の中を突走ったところに再び植林した沿道が現れるようになる。そうするとまもなく林がみえてくる。林を通過すると荒地地になる。やがて小さな村に入る。村の入り口で少し休憩する。休憩場所の近くに一軒の家が見える。近づくとも母親と2、3人の子供がでてきて興味深くこちらを見つめている。土壁づくりの家に興味を抱き、カメラのシャッターをきる。約10分ばかり休んで再び出発である。走り出して30分もすると雑草が一面に生えたあたかも田園地帯のような場所を通過する。砂漠の地というのにこのような場所が少しでも続くのは想像を越えるものであった。田園地帯を越えてしばらく進むとやがて大きい町に入った。于田<sup>ケリヤ</sup>である。ここで一行は昼食をとることにした。どこに食堂があるのかと思われる町並みであるが、近くにある<sup>スス</sup>煤だらけの家に

案内されると、そこが食堂であった。奥に入ると土間の上にテーブルと椅子が置いてあり、全員そこに腰をおろした。注文されてでてきた料理は羊の肉と野菜を片栗粉でミックスしたものをうどんにかけた、いわば皿に盛られた中国風の肉うどんとも言えるものである。味は結構日本人にあって美味であった。約一時間余り休んで于田を出発した。砂利道を通り、砂漠の中を通ること約2時間弱で、植林された沿道に入ってきた。ふと前方に目をやると広大な緑地帯が遠くに幅広く広がっている。新しい村に来たのではないかと想像していると、そこが今日の目的地の民豊<sup>ミンフン</sup>であった。人通りの多い道路を通って民豊<sup>ミンフン</sup>の宿泊所に着いたのが15時35分である。宿泊所はこれまでに利用したどのホテルよりも不便で、風呂は湯が出ず水だけで、トイレは半分壊れた状態で水を流すとすぐに詰まって使えない。仕方無しに隣の部屋のトイレを借りて用をたそうとしたが隣のトイレも同じように壊れていた。結局、自分の部屋のトイレで外から水を流し込めば使えることがわかったのでどうにか安心した。いよいよ、明日がはじめて砂漠へ向けて出発する日である。それに備えて、16時から夕食までの時間を費やして、全員ですべての装備を点検整備することにした。行動中に必要なトランシーバーがなかなか見つからず、あきらめかけた頃になってやっと出てきた。20時に夕食。23時就寝。

10月2日

午前7時起床。7時30分朝食。8時30分出発。

日本隊、中国隊は全員4台の車に乗り込んだ。日本隊の車への分乗は以下の通りである。

- 1号車(砂漠車)(小島、孫)
- 2号車(水タンク車)(真田)
- 3号車(荷物用大型トレーラー)(吉崎、高橋)
- 4号車(砂漠車)(井ノ口、田辺、伊東、浅岡、高妻)

民豊<sup>ミンフン</sup>の町を出発し、尼雅<sup>ニヤ</sup>川に沿って北上した。約40分で本線からはずれてタマリスク(紅柳)の茂る荒れ地を進む。遠方に砂丘群が見える。葦のようなイネ科の植物が覆い茂った地帯を進む。一度休憩して再び進むとやがて胡楊<sup>コヨウ</sup>(ポプラの一種)の林が見えてくる。砂漠にしては緑の深い地帯を進んで行くと何やら人家がチラホラ見えてくる。さらに、広大な綿花畑がみえ、畑のあちこちに若い女性が働いているのが見える。そうこうすると間もなく立派なポプラ並木に入ってくる。カパクアスカン村である。ここが尼雅<sup>ニヤ</sup>遺跡に最も近い村で、かつ人家が見られる最後の地である。14時過ぎに、4台の大型車が止まるとどこからともなく村人がでてきていつの間にか我々一行は村中の人に囲まれた。カメラをむけても嫌がらず愛相よく応じてくれる。ここでは多くの子どもたちが裸足でかつ服装も質素であった。村では羊や西瓜などの食料を調達した。出発は15時。すべての準備が整い、あとは砂漠の中にある尼雅<sup>ニヤ</sup>遺跡に向かうのみである。村人が見送る中を進む。途中一箇所人家のあるところを通りかかると小さな子ども二人に出会う。タマリスクの灌木の生えた茂みを突き進むとやがて徐々に灌木が少なくなり、砂漠に近づく。カパクアスカン村を出て約45分経った頃、運悪くタンク車が立ち往生した。荷台のワラがディーゼルタンク車の煙突の熱で燃える。民工さんの助力で車は深い砂の中から脱出するの<sup>ダイバサツ</sup>に成功した。もう少しで砂漠へ出るところである。近くはやや丘陵状になった砂漠のてっぺんには大馬扎と呼ばれるイスラム教の巡礼の聖地となっているほこらが見える。17時30分タンク車が故障。18時30分荷物車故障。一号車救援に行く。19時45分荷物車が我々に合流。砂漠の途中で野営することになる。全員でテントを設営し終え、夕食にありつけたのは21時40分であった。ちなみにメニューはラーメンとナシ1個であった。結局タンク車は故障の修理が不能となり、放棄することにする。

10月3日

午前7時30分起床。8時朝食。9時20分出発。9時45分1号車パンク。10時20分修理完了。このあた

伊東：幻の古代都市『<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡』を訪ねて

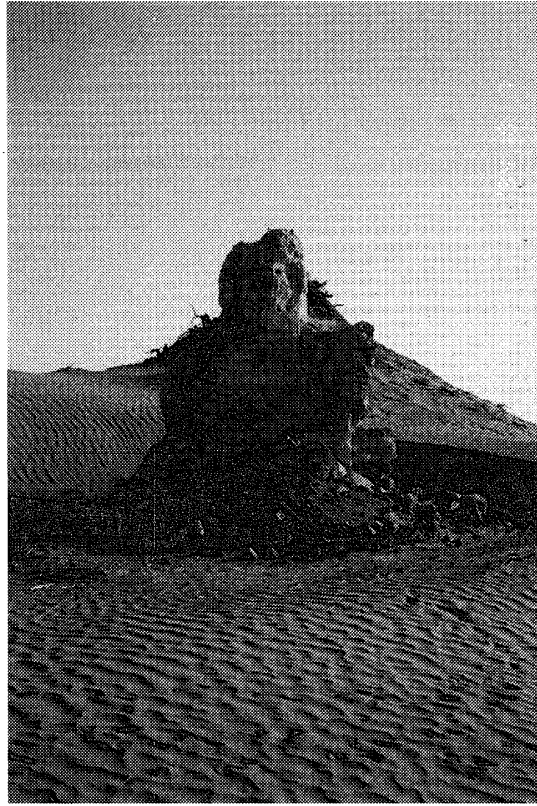


図 2

りはタマリスク堆の広がる場所。10時25分出発。タマリスクのみの広い砂漠を通り過ぎる。12時15分道に迷う。ここで昼食。13時15分出発。逆戻りして本来の道を探し当てる。16時30分再度露営する事に決定。テント設営。暗黒の砂漠の中で懐中電灯が唯一の光である。満天の星空で天の川がくっきりと見られ、昔、子供の頃に見上げた星空が思い出される。

10月4日

午前7時30分起床。8時朝食。9時50分露营地出発。10時30分仏塔（ストーパ、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の中心地）（図2）に到着。12時20分テント設営完了。その後N2住居址を見学して15時にキャンプ地に戻る。15時から19時まで物品の整理その他の準備作業。22時夕食。22時40分明日以降の調査のため日中合同ミーティングをおこなう。

10月5日

午前8時朝食。いよいよラクダに乗っての調査の日が来た。調査に加わるのは伊東、高妻、楊、アホマティーそれにラクダ使いのマイマイティの5名である。10時20分出発。他の隊員は基地近くのN2住居址の発掘調査に向かう。<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡は南北に長く伸びている遺跡であり、そのほぼ中心部に仏塔があるという配置になっている。初日にはまず北方を調査することになった。ベースキャンプを出発してしばらくは起伏の多い砂漠をラクダで進行する。初めての体験で緊張するとともにきわめて新鮮なものを感じ、一步一步が興味深く感じられた。最初に調査したのはN9の住居址であった。N9の南側に一列に並んで枯死した大木があったのでこれらのうちの4本から木片を採取した。なおこれら大木には根が付いていた。次に調査したのはスタインの記録にあるN26ではないかと思われる住居址で、その南側の垣根





図 3

に沿って枯死して立っていた大木3本から木片を採取した。なお、これらの大木にはすべて樹皮が付いていた。さらに北上していくと、せいぜい直径15cm以下の小径の樹木が数多く立ち枯れている場所を通りかかった。樹木は群をなして分布しており、この場所からすべてで10個の木片を採取した。ラクダの隊がさらに北に向かうと、やがて先端部が大きく二股状に分かれた形状の大木が数本立ち枯れている地点に達した。本調査で最北端にあたる場所である。中国隊の研究者に聴くと大木は桑樹（サンス）という種類であるという（図3）。二本の桑樹から試料を採取した。また、桑樹の近くに大木がまとまって枯死しているところがあり、これらのうちの3本からも試料を採取した。その後、ベースキャンプに戻るべく進路を南の方向にとった。桑樹から間もない地点に住居址があり、最北端における住居址の年代測定用としてその柱のうち4本から試料を採取した。この住居址では柱が入口のように左右対称の位置に立って残っているものがあつた。また、陶器の破片が多数みられた。特に、大型の瓶が壊れて地面に散在し、その口の部分が残存するとともに口にピッタリと合う木製の蓋がそばに残されていた。その蓋は現場に置いておけばいずれ散逸消滅する恐れがあつたので、持ち帰り中国隊に手渡した。その後蓋の材片の一部を樹種同定のため提供を受けた。この住居址の調査の前から風が強くなり、住居址の調査の時は流砂で相当にてこずった。風が弱いときはまだましであるが、強くなるとサングラスの間から砂が目に入ってくるのを防ぐことができない。帰路も流砂が止まらず、不毛の砂漠は360°見渡す限り砂塵にけむり、視界が完全に制限される。隊を離れて別の遺跡に調査に出かけた中国隊隊員のアホマティーが帰って来るまでの短い時間は流砂の怖さを感じたものであつた。ベースキャンプに戻るまでもう一箇所自然木の生える地点で直径10~20cmの枯れ木3本から試料を採取した。ベースキャンプに帰ったのは夕方7時頃であつた。朝10時からの行動であるので約9時間ラクダで移動していたことになる。ラクダは双こぶラクダでありそのこぶの間に乗って移動するのであるがラクダの背中はかなり幅が広く長時間乗っていると股間が痛くなるほどである。

10月6日

午前8時30分朝食。10時出発。今日はベースキャンプから南方に広がる遺跡の調査である。ラクダ隊の構成は日本隊は隊長の小島、伊東、高妻、孫の4名、中国隊は楊（中国科学院地理研）、王<sup>オウ</sup>邦<sup>ボイ</sup>維、李<sup>リ</sup>季<sup>ジ</sup>、楊<sup>ヤン</sup>林<sup>リン</sup>、アホマティーの5名、それにラクダ使いのマイマイティーとコルバンを加え、合計11

伊東：幻の古代都市『<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡』を訪ねて

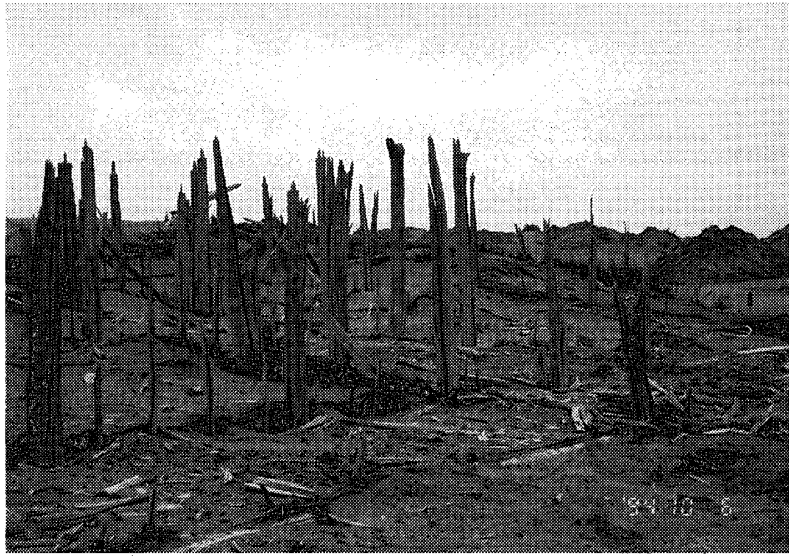


図 4

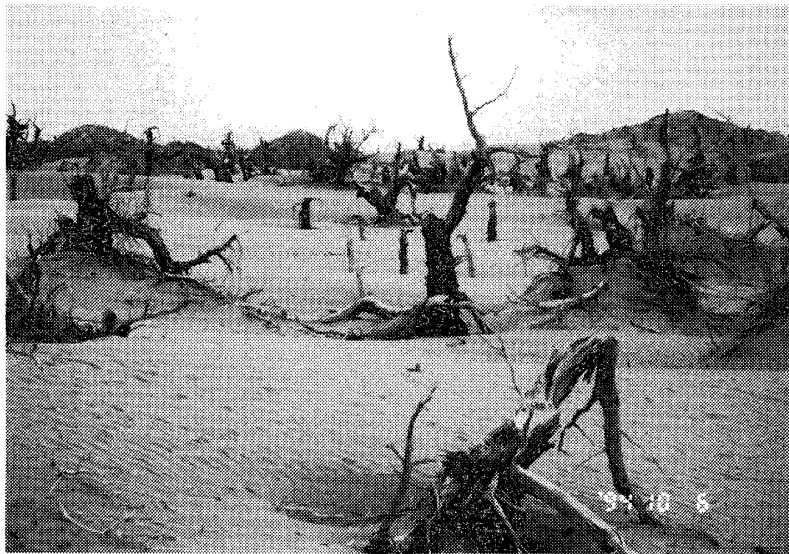


図 5

名である。ベースキャンプを出て仏塔から南に方向をとる。タマリスク堆の間をいくつか通り過ぎると間もなくN3の住居址にたどり着く。かなり大きい住居址である（図4）。住居を囲む垣根の外側に立ち枯れした大木が多数一列に並んで倒れていた。そこから3本の枯死木を選び、試料を採取した。同時に住居址の柱材から3本を選び剥がれかけた部分から木片を採取した。N3のすぐ隣にN4の住居址があり、住居の横に規則的に並んで植栽された大木3本から試料を採取した。隊はさらに南に道を取って進むとタマリスク堆のようなマウンドに胡楊と思われる大木が3～4本立ち枯れした場所があり、その内の1本から試料を採取した。この位置から南へ進むと格好のタマリスク堆があったので、これら灌木のうち3本から試料を採取した。ここから南へ進むと広範囲に広がる樹林帯にさしかかった。一面に大木が立ち枯れしており、まるで樹木の墓場とでも形容できるような不気味な光景である（図5）。この樹林帯の南の方に位置すると思われる場所で2本の枯死木から試料を採取した。このあたりで丁度午後



図 6

2時になったので昼食をとることにした。ラクダが一部生き残った樹木の葉を与えられている光景を目にした。葉の形状からこの樹木は胡楊であることがわかった。我々はここで胡楊の葉を錯葉標本用に採取した。昼食後、隊は胡楊樹林の中を進み、樹林を通り過ぎて間もなくスタイン隊の発見で命名された ancient bridge にたどり着いた (図 6)。幅広く土のえぐれたところに幅約 40cm、厚み約 20cm の角材が 3 本に折れて横たわっていた。全長は 15m 近くに達する。その広大な光景から、なるほど川が干上がった場所のように見受けられた。川底には粘土質の土が層状に幾重にも重なって堆積しており、水たまりとして残ったところに前述の土が堆積したものと想像された。ancient bridge のすぐ近くに 93A-24 住居址があり、その住居址の土台に使われた角材 3 本から試料を採取した。さらに 93A-24 住居址の左の北側にある住居址のそばに立ち枯れした大木 (一部は桑樹に類似) のうち 3 本から試料を採取した。このあたりが本日の調査における最南端に相当する。ここまでたどり着くのに相当時間を要したので帰路は途中で止まることなく一挙にベースキャンプに戻った。夕方 6 時 30 分を過ぎていた。

10月 7 日

ニヤ遺跡滞在最終日である。今日はベースキャンプに最も近いところにある N 2 の住居址から試料を採取することに専念した。N 2 住居址は約 20 の住居が約 150m 四方に点在している。そこでどの場所から木片を採取するべきかを定めるために、まず各住居を見てまわった。その結果 N 2 の住居址のうち No.10 の住居址内で、自然枯死木を含む 5 本の木材から試料を採取した。そして本年度発掘調査対象となった No.19 住居址からは 50 個の木片を採取した。その方法は No.19 住居址の完全な発掘調査のために設けられたメッシュ (地上 30cm 位の高さで、糸ひもを用いて格子状に区画された場所) から試料を採取するというもので、1 つのメッシュから 1 試料採取して、平均的な試料採取を図った。なお、本住居址では、直

## 伊東：幻の古代都市『<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡』を訪ねて

立する柱からはサンプリングすることをせずメッシュ内に散在する木片から試料を採取するように心がけた。

試料採取中も常に遺跡発掘のためメッシュごとに表面のおびただしい量の砂が掻き出されていた。しかも風の吹く中でおこなわれたので、掘ってもすぐ砂で埋まるために大変な作業であった。そのような作業の邪魔にならないように試料を採取することに注意した。

10月8日

<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡を去る日である。午前9時30分ベースキャンプ出発。14時20分<sup>ミンファン</sup>民豊着。予定では<sup>ミンファン</sup>民豊の宿泊所に滞在するはずであったが、風呂の温水が出ないということで一挙に<sup>ホータン</sup>和田の宿泊所に向かうことになった。15時25分昼食後<sup>ホータン</sup>和田へ向けて出発。18時25分休憩。19時頃<sup>ホータン</sup>和田に到着。<sup>ホータン</sup>和田宿泊所で温水シャワーを浴びて遺跡調査の疲れから解放され、ほっとした。バスタブの底にはびっしり砂漠の砂がたまっていた。

### 4. 樹種同定結果

建築材の使用樹種を明らかにして、樹種と用途との情報を蓄積すれば約2,000年前といわれる精絶国における人々の木に対する思いすなわち木の文化的要素の一端が解明される。また、建築材の樹種を解明することにより、製作場所が現地性かあるいは近隣の国から運ばれたのか、さらには遥か遠方よりシルクロードを経由して運ばれたのかを明らかにできる可能性がある。以上のことを念頭において、建築材などの木製遺物74点の樹種の同定をおこなった。

一方、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡周辺の自然植生を調べることは<sup>ニヤ</sup>尼雅の人々がどのような自然環境のもとで生活を営んだのかを知る手がかりを与えてくれる。本調査では調査期間に限りがあったために広範囲には調査できず、<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の住居址用材の調査の際に目にとまった自然木を調査の対象とした。これらは、住居址群の間に点在する枯死自然木が大半でその中には直径40～50 cmほどの大木が数本まわって枯死していたり、あるいは広大な面積にわたって広がる樹林帯の枯死木であったり、さらには枯死灌木などである。また、自然木とはいいがたいが住居の周囲に庭木として植えられたと思われる枯死した巨大樹木も本調査の対象とした。調査を行った自然木および庭木は総数46点にのぼった。建築材をも含めると総点数は120点となり、内訳は以下の通りである。

自然木(33点)	ハコヤナギ属	25点	庭木(13点)	ハコヤナギ属	9点
	ヤナギ属	4点		ヤナギ属	2点
	タマリクス属	3点		タマリクス属	1点
	スナナツメ	1点		スナナツメ	1点
木片(62点)	ハコヤナギ属	53点	住居(柱、土台)	ハコヤナギ属	9点
	ヤナギ属	2点	古代橋	ハコヤナギ属	2点
	タマリクス属	5点	瓶の蓋	ハコヤナギ属	1点
	草本	2点			

以上から、自然木、庭木、住居、橋などの木材に使用されているのはほとんどがハコヤナギ属であることがわかる<sup>6)</sup>。ハコヤナギ属の中のどの種類かについては、現地で現在でも生育する<sup>コヨウ</sup>胡楊である可能性が極めて高いと推定できる。その他にはヤナギ属、タマリクス属のほかスナナツメなどが若干数用いられていた。

## 5. おわりに

今回の<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡の調査では、約2000年前の遺跡にもかかわらず、<sup>コヨウ</sup>胡楊からなる住居柱が林立していた<sup>サマ</sup>様に変な驚きを感じ、未だにその情景が脳裏に焼き付いている。また、出土した夥しい量の木製品に砂漠の遺跡というイメージが掻き消される思いがした。出土木棺にみられる数々の副葬品には色鮮やかな絹の錦織も数多くみられ、極めて重要な遺跡であることが伺える。その一方で、中国の僻地で生活する人々に接することができたのも大変いい勉強になった。遺跡の入り口にあり、遺跡に最も近いカパクアスカン村では子供が裸足で、村人の身なりも洗練されているとはとても言えないが、子供の目は輝いており、大人達も素朴で、人なつっこい印象を受けた。我々の生活のように近代的な上・下水道設備もなく、水の供給が大幅に制限されている砂漠の地でありながら、村の至る所で、綿の栽培や、西瓜や瓜の栽培をおこなっており、農作物が予想外に豊富にみられた。このような光景を目のあたりにして、文明の発達とは何か、についてしばし考えさせられた。

本稿を終えるにあたり、貴重な調査の機会を与えていただいた、小島康誉隊長、中国新疆<sup>ニヤ</sup>尼雅遺跡学術研究機構代表で元佛教大学学長の水谷幸正先生に感謝申し上げる。また、現地調査にあたっては、井ノ口泰淳龍谷大学名誉教授、田辺昭三神戸山手大学教授、真田康道佛教大学教授をはじめ、多くの若い隊員諸氏にお世話になった。これらの方々に感謝申し上げます。言うまでもなく、本調査は日中共同の学術調査であり、現地の調査に当たっては、中国側の隊員、とりわけ、新疆文物考古研究所の方々に大変お世話になったことを付記し、稿を終える。

## 文 献

- 1) Stein, M. Aurel, Ancient Khotan-Detailed report of archaeological explorations in Chinese turkestan, Vol.I Text, Vol.II Plates, Oxford at the Clarendon Press, 1907
- 2) 長沢和俊編：大谷探検隊 シルクロード探検、白水社、1978
- 3) 井上 靖・長沢和俊・NHK取材班：NHKシルクロード 第4巻 流砂の道、日本放送出版協会、1988
- 4) 井上 靖：シルクロード紀行 上・下、岩波書店、1993
- 5) 玄奘著 水谷真成訳：大唐西域記 中国古典文学大系 22、平凡社、1971
- 6) 日中共同尼雅遺跡学術調査報告書第二巻 本文編、日中共同ニヤ遺跡学術調査隊、177-183, 1999